

われまんかちに争ふな
流るゝ水の清ければ
淺瀬に入りて魚どるも
水をきたなくする勿れ
取りて除けよ人のため

飲水にする家もわり
淀におよさならふにも
汚さるものゝもしあらば

蛙の解剖

ろすゐ

鬼

思の淵に身を沈め
はかなき者よ今日よりは

泣明しける汝が身の
歸らぬ道に一人旅

蛙

罪なき者をむぎくと
殺さば殺せ思ひきや

ナイフの尖に己が儘
此世に鬼の在んとは

鬼

同じ此世の生ものを
道しるべぞと諱めて

殺すも己が出世の
死んでくれかしやよや君

蛙

死ぬる命はふしまねど
歸り遅しとまつの戸よ

手足を雨にすゝく間も
残る母あり妹あり

鬼

心の鬼にあらぬ身の
すいろに落つる涙川

汝が身の上さく時は
とむる關なし雨の眼に

蛙

駒場に茂き萩の露
生かすは御身の爲をらず

何れ短かさわが命
いざはね給へいざ給へ

鬼

道理にあかさ汝が身を
母と妹を大切に

殺すは人の道ならじ
楽しく世をば送れかし

蛙

君がなさげに深草の
文運開始聲高く

軒の雫に身をきよめ
歌ひをさん今得こそ。

月前の菊

加藤 ひな

虫の音さえて風さむく
霜にたはまぬ白さくに
秋をわはれどたかいひと
にはひもまさる菊の花

なかめ淋しき夕まくれ
光そへたるつきのかけ
ひかりさやけき月影に
げに風情ある夕まくれ

同

小島 たつ子

千草の花もうつろひて
ひとりにはふか菊の花

あたり淋しきませの中
すむ月かけを友として

同

鶴田 八重

月影白く夜はふけて
まかきにさける白菊の

霜のひかりも置そひぬ
かをりは空に匂ふなり

同

田島 ます子

千草の花もかれし野に
霜にあへすもうつろ

月影落ちて風さむし
秋の村菊あなわはれ

八雲 艦

鈴木 ゆき子

千早ふる神のいふきに
どいろきて黒雲おこし
日の本の國のいしずゑ
八雲艦あなたのもしの

八雲艦いかづちのごと
わたの原走るを見れば
いや高しあな勇まし
八雲かん

暮 秋

東 くめ子

心なしてふ草木さへ
風も吹かぬにはらくと

秋の限を惜むらん
葉末の露のこぼるゝよ

森 かげ

小林 恒子

夕の星にあこかれて
誰を松風か聞きなれし

何時か來にけり森蔭に
ピアノの音のなつかしや